

## 意見

## アコルーティアの地平

宮本 久雄

アウグスティヌスの『告白』11巻以降の『創世記』解釈はパシレイオス風の自然科学的解釈を超えた比喩的解釈の試論のようにみえる。そこではしかし一体何が問題となっているのであろうか。それは簡単に捉えにくい。というのも彼は様々な聖書解釈の位相を往来しているからである。一例をあげて考えてみよう。彼は天地創造の解釈において、天を霊的被造物、地を無形の質料として比喩的に解釈する。その際無形の質料は御言によって形相を与えられて存在した(13巻2・2)。これに対し霊的被造物はさらにその御言の方に向きなおる(*converti*)、照らされて形成されるといわれている。そこでは自然科学的説明ではなく霊的被造物の回心の必然性に関する形而上学的説明がなされている。そして「暗い淵」は「回心し照らされる以前の、ただよい流れる状態にとどまる形なき霊」(5・6)とされ、そこから「私たち」霊的被造物をひき上げるのが愛(*caritas*)であり、逆にそこに引きずり込むのが情欲だと語られる(7・8)。これは聖霊・愛に関わる神学的解釈である。この土台の上に彼は周知の「私の重さは私の愛」といういわば自己実存の根拠を開陳する(9・10)。その「私」とは告白全体が語る、淵に沈み回心し上昇し続ようと自己探究するアウグスティヌス自身に外ならない。だから彼にとって創世記の創造とは自己の新生に落在するのである。ここに自然科学風な『創世記解釈』が愛智の思索に転換している。アンブロシウスの例もあげてなされた荻野氏の発表の骨子はこの点にある。この発表をふまえ連続的創造の立場から「私」の連続的新生・生成が問われ(山本巍氏)、と同時に「私」の成立が他者とのコイノーニアに関わる以上、その他者問題が問われ(谷隆一郎氏)、いずれも教父の聖書解釈の地平でどのように問題が展開するのかというさらなる問いを喚起した。

論者はこの問いを探究する上で、『創世記』のみならずどうしてもオリゲネスやニュッサのグレゴリオスなどが辿った『出エジプト記』や『雅歌』解釈に連続して踏み込まざるをえないと考える。というのも、『雅歌講話』においては花婿と花嫁の相互的交渉のドラマを通じ自己の新生や共同体の成立が問題とされており、それはモーセやイスラエルの民の新生を語る『モーセの生涯』にあっても同じだからである。ところで

雅歌の解釈に直に着手する以前に何よりも『箴言』と『伝道の書』の解釈が要請されている点に注意する必要がある。なぜなら、徳殊にアパテイアや自然の観照 (Theoria) の基礎付けなくして雅歌の神秘の闇やエクスタシスに直参すると『出エジプト記』の金の小牛事件に象徴されるように、人は幻想や情欲の虚無に陥るからだという。こうしてみると例えば旧約に限ってみても教父の聖書解釈は諸書を一連のつながりにおいて読む連続的統一的道行き (アコルーティア) を辿っていることが分かる。すなわち、『創世記』『出エジプト記』『箴言』『伝道の書』『雅歌』などをアダムの墮落や自己分裂から自己の新生、他者との交流、共同体の成立へとという風に連続的統一的 (アポケバライオーシス) な仕方でも読み破り読み直し進むのである。このアコルーティアは例えば『創世記』一書にも適用される。つまり『創世記』を個別的アトム的にエピソード毎に象徴的に解釈するのではなく、一つの筋や目的連関内に統一的に読むのである。恐らくこの統一的読解の視点こそ、教父の聖書解釈の根底的方法として理解されよう。しかもこの視点は、アコルーティアがオイコノミアの意味をも具備することが示すように不断の回心とは自・他の連続的創造的交流の歩みそのものでもある。論者はこのメタノイアの修徳的行為論的なアコルーティア解釈に着目したい。最後に現代の言語哲学や聖書釈義学で定義されたアレゴリーやメタファーなどの意味が教父における根拠現成のアレゴリアやメタフォラなどの意味と重ならないばかりか、釈義学上修徳上また意味論上むしろ放棄になっているのではないかと思われるので、教父の聖書解釈の研究を通じて逆に現代の解釈学の視点や方法などを豊かに再考察し、脱構築できるのではないかと考える (森泰男氏との関連で)。

## 意見

## 創造と受肉をめぐって

谷 隆 一 郎

提題者お二人の言葉を借りれば、「創造は過去の一時的な出来事にとどまらず、聖句の現存を通して今や読者自身が造り変えられるよう招かれている」のだが、そのことはまた、「テキストの読解が愛智として展開されねばならぬ」ゆえんの根源的事態であろう。だがそれにしても、神を主語とした「世界の、そしてつまりは人間の創